004 TICA

健さんの本を探す嗅覚は本物だった。ラーメンズの絶版になっている「微妙ハンター」をどこからか探してきてくれた。それも図書館のものとは大違いのとても綺麗な本。麻薬を探す犬の鼻より、トリュフを探す豚の鼻より、本を探す健さんの鼻の方が素晴らしい**

著作	著者	あらすじ・感想
泣きの銀次 ～晩鐘～	宇江佐真理	【小間物問屋・坂本屋銀佐衛門こと銀次も４０歳。再び十手を握って、娘拐かし事件の解決に乗り出して…。死人を見ると涙が止まらない岡っ引き・銀次復活！】 前作の「泣きの銀次」から１０年。話の中も１０年経っている。いくらなんでも間開きすぎ。死体を見ると泣くという特徴と登場人物くらいしか覚えておらず前作をすっかり忘れている。そして想い出した。わたしの好きなのは銀次じゃなくて権佐だった。
我、言あげす 髪結い伊佐次 捕物余話	〃	【江戸を騒がす凶悪事件に某大名家の姫君失踪、晴れて番方若同心となった不破龍之進は伊三次や朋輩と共に勇躍、奔走する。一方、お文はお座敷帰りに奇妙な辻占いと出会う】伊佐次シリーズ第８弾。前回から主役が伊三次から龍之進の息子になることが多い。肝心の伊佐次の話はというと、ネタ切れかと思えるような今更の夢おち。子供が二人も出来て最初のころのてやんでぇっぽさがなくなり、下っ引きとして主役を張るには落ちつきすぎたか。
しまなみ幻想	内田康夫	【広島県と愛媛県を瀬戸内の島々で結んだしまなみ海道。その来島海峡大橋から飛び降りたという母の死に疑問を持つ少女・咲枝。彼女と知り合った浅見光彦も、その死に疑問を抱いた。母親は殺された?しまなみ海道を訪れた浅見は咲枝とともに調査に乗り出す。美しい海と島を舞台に、浅見光彦が活躍する旅情ミステリー】
遺骨	〃	【製薬会社社員が死の直前に預けた骨壷。それを持ち去った謎の女。錯綜する事件の接点は、金子みすゞゆかりの地山口県仙崎に。ルポライター浅見光彦が遭遇した医学界の恐るべき真相とは？】 なかなか読み進まず、挙句に斜め読みした。それで面白いわけがない。浅見光彦が人の名前を騙ったり、潔癖な万年坊ちゃんとは違った印象。先週ドラマ化になったので見たが、寝落ちした。

隠蔽捜査	今野敏	【竜崎伸也は警察官僚である。その朴念仁ぶりに周囲は〈変人〉という称号を与えた。だが彼はこう考えていた。エリートは、国家を守るため、身を捧げるべきだ。私はそれに従って生きているにすぎない、と。組織を揺るがす連続殺人事件に、竜崎は真正面から対決してゆく。警察小説の歴史を変えた、吉川英治文学新人賞受賞作】 うさおさんの部屋からそっと持ってきた本。どうもありがとう、面白かった。 主人公はとても共感を得ないタイプだと思って読み進めていったが、そのまっすぐさに理想を見て段々と惹かれていく。今にも映画化されそうな話。竜崎は段田安則じゃ意外性がないから遠藤憲一で。伊丹は役所広司の若い時かトヨエツで。…と思ったらとっくにドラマ化されてた。陣内孝則と柳葉敏朗だって！？きゃー(>_<)知らないでよかった…。
２０２２年の影	赤井三尋	【バーチャル空間に生き続ける人格が独り歩きを始めたとき、人類未体験のパニックが社会を襲う—最先端のコンピュータ科学の暴走に立ち向かったのは、高僧の鋭い直観と、いとけなき幼女の健気な意識だった。乱歩賞作家・赤井三尋が放つ、近未来の戦慄！】
絶望ノート	歌野昌午	【いじめに遭っている中学２年の太刀川照音は、苦しみや両親への不満を「絶望ノート」と名づけた日記帳に書き連ねていた。いじめグループ中心人物の殺人を神に依頼し、望みは叶えられた。しかし、いじめはなお収まらない。照音は次々に名前を日記帳に書きつけ神に祈り、そして級友は死んでいった。不審に思った警察は両親と照音本人を取り調べるが、さらに殺人は続く—】
誘拐の誤差	戸梶圭太	【本格警察小説。１０歳の子供がいうどうしようもない男に殺された。捜査に乗り出す警察だったが、犯人にはなかなか辿り着かない。それにはある警察内部の事情があったのだ。ゾッとする怖さを秘めたミステリーの傑作登場】本屋さんのコピーがこのあらすじより遙かに面白そうだった。でもだまされずに図書館で借りて正解。殺された男の子が形を失くして彷徨いながら警察や親の本心を知っていく。犯人は捕まらないし、ＤＱＮばかりで救いようがない。どこが本格なのか、どこが警察小説なのか。

小暮写眞館	宮部みゆき	【花菱英一の両親は、結婚２０周年を機に念願のマイホームを購入する。その家は、もと写眞館だった築３３年の古い家だった。「小暮写眞館」の看板をそのままにしていたため、ある日心霊写真が持ち込まれる。英一は、その謎解きに乗り出す―。４編を収録。物語のすべてが詰まった７００ページの宝箱。著者３年ぶりの現代エンターテインメント長編】７００ページの分厚い本のどこにも悪い人が出てこない仲良し家族の物語。不動産会社の事務員の柿本順子は、態度も言葉も悪く精神も不安定な人で高校生の主人公とその友人が好意を寄せるような人にはまるで思えない。年齢が 20 代前半と書いてあったにも関わらず、私の中では久本雅美になっていた。 学校の友達がとてもよかった。オタク万歳。
殺人学生街	東野圭吾	【学生街のビリヤード場で働く津村光平の知人で、脱サラした松木が何者かに殺された。「俺はこの街が嫌いなんだ」と数日前に不思議なメッセージを光平に残して…。第 2 の殺人は密室状態で起こり、恐るべき事件は思いがけない方向に展開してゆく。奇怪な連続殺人と密室トリックの陰に潜む人間心理の真実】昔読んで面白かった本が読みたいと思うことがあるが、読んでみると空気の違いにがっかりすることが多い。この本は読んだことはなかったが、21 年前に書かれた話。新しければ面白いわけではないが、全体に流れる古臭さが読みづらかった。
わたしが 彼を殺した	〃	【脚本家であり作家でもある男が新進の詩人との結婚式当日に毒殺された。容疑者は、男のマネージャー、敏腕編集者、詩人の兄の 3 人。物語は、容疑者 3 人の一人称三視点で構成されるが、うち 2 人は事件後に「自分が彼を殺した」と述懐している。残る 1 人も、被害者への憎悪や殺意を隠そうとはしていない。だが、実際に手を下したのは 1 人―。誰が彼を殺したのか？本文では犯人が特定されていない。文庫版は、西上心太さんの袋とじ解説に真犯人を示唆するヒントが記されている】ぼーっと読んでいた。袋とじで犯人がわかると確信していたから。袋とじにしてあるのは読者への挑戦で、解説の西上心太っていうのは小説の中の誰かの名前で、袋とじを開けたら解決してくれる人だと思っていた。とんでもないことに別の発行の本だと犯人は違う人らしい。頭抱える。